

そういうのじゃないよ

群馬県立中央中等教育学校

一年 荻 健太

皆さんにとって「友達」とはどのような存在でしょうか。幼稚園生のときは、身近にいる子を、小学生のときはクラスや委員会など、同じ集団で過ごす人のことを友達と周りの大人が言っていました。このことから、友達とは、「同じ場所で志をともにする関係」のことだと私は思っていました。しかし、中学生になり、自分の行動範囲が広がると、「顔見知り」というだけで友達だと言うこともあります。関係の輪が広がっていくというメリットはありますが、友達の基準が下がって、人との関わりの価値観が狂ってきてしまっているように感じます。同年代を見渡しても、人との適正距離が分からなくなっていく、傷つけられるということが絶えず起こってしまっているようです。同じ場所では志をともにする友達という言葉は、いつから傷つけ傷つけられる関係のことも、指すようになってしまったのでしょうか。

私は幼い頃から軽度の吃音を持っています。吃音とは、「わ、わ、わ、わたし」のように同じ音や音節を繰り返す「連発」や「わーーたし」のように音を引き伸ばす「伸発」、「…わたし」のように言葉が詰まって出てこない「ブロック」などを起こす発話障害です。ときに、吃音は軽蔑やいじめの対象になります。特に私のように、吃音の症状が軽いと、「ふざけている」や「緊張している」と思われやすいのです。

そのため、私は、吃音で、たくさん場面傷つけられてきました。真似されて笑われたり、言葉が出ないときに「早く言ってよ」と言われたりしたことが何度もありました。「ちゃんと喋ってよ」や「気持ち悪い喋り方」と言われたこともあります。私は、「相手に悪意はないから、吃音を知らないから…」と思い、空気を壊さないために、一緒に笑ったり、謝ったりしながらも心は深く傷つけられてきました。笑われることが多くなってきた頃から、積極的に発言することが減り、人に話しかけることも少なくなっていました。吃音で笑われないために。

六年生の春ごろ、あるクラスメイトから「言葉が詰まることがあるけど、それってなんなの。」と言われました。その日の授業中に吃音が出て少し笑われてい

たためです。しかし、そのクラスメイトは私の吃音で笑ったことがなく、真剣な顔で言うものですから、私もきちんと吃音について説明しました。笑ったりせず、ただ頷いてくれました。彼なりの気遣いだったのだろうと思います。それから、彼は気まずそうにせず、これまでと変わらずに接してくれました。そんな気遣いをしてくれる彼だからこそ、仲良くやってこられたのだと思います。吃音を理由に嫌な思いをしてきた私にとっては、吃音のことを気にせず変わらずに接してくれるだけでも、とてもありがたく感じていました。

そして月日は流れ、二月ごろ、私はクラスメイト三人と遊ぶことができました。吃音のことを話した彼もいました。遊んでいると、ふと「連発」がでてしまいました。彼以外の二人は真似をして笑いました。私も少し笑っているふりをしました。その時でした。「今のはそういうのじゃないよ。ふざけじゃなくて、吃音っていう言葉が詰まったりする病気みたいなものだよ。」と彼が言いました。私は、目が潤みました。すると、笑っていた二人も、「そうだったんだ。ごめんね。」と理解してくれたようでした。

「そういうのじゃないよ」。彼は吃音を笑うことはなかった。それだけでなく庇ってくれた。吃音のこと

を言ったとしても、どうせわかってくれない、心の底から理解し、支えてくれることなんてあり得ない、そう思っていました。しかし、私は、彼に心を助けられたのです。

悩み苦しんでいることは、なかなか自分から言い出しにくいものです。目の前の人が苦しんでいる、そんなときに、その人を助けるために、相手をよく観察し、本当の心情に気づき、苦しく辛い思いをしていると理解する。このプロセスを通すことで、「顔見知り」を超えて、「同じ場所で志をともにする関係」を超えて、「大切に思い支え合う」そんな深い関係に変わっていくのです。自分から話しかけ、心から助けることができるような関係こそが「友達」なのではないでしょうか。これが、これこそが、今の社会で必要な関係なのではないのでしょうか。

私は彼の「そういうのじゃないよ」というたった一言によって救われました。本当に大切な「友達」を助けるためにも、自分から声をかけてあげてください。友達の基準が下がってきている世の中だとしても、そこには、本当の「友達」が生まれることでしょう。